

絆 求め て

3月12日発行

文責 幼児教育専門員 久保田学



「子ども主体の保育」について

平成29年に「幼稚園教育要領」が改訂され、今年で7年となります。この改定では、幼稚園教育において育みたい資質・能力が明確に示されました。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が示され、小学校への接続を推進することがクローズアップされました。これを受け保育者には、遊びを通して子ども達の「主体的・対話的で深い学び」の実現のための指導の改善が求められています。さて、先生方の日々の保育はどうでしょうか。園訪問の際、「子どもにとっての主体的な学びとはどんなものか」「子どものやりたいことだけやっても、小学校につながるのか」「指導計画に沿った保育ではだめなのか」など、様々な声が聞かれます。ところで、子ども主体の保育とはどんな保育でしょうか。昨年の10月の現職教員研修で、清泉女学院短期大学の西山薫先生より「これからの幼児教育の在り方をめぐる近年の動向」についてご講義いただきました。その際、玉川大学教育学部の大豆生田啓友先生が園への質問をもとに分類した、保育の4パターンについて紹介いただきました。以下にその内容の一部を紹介します。

<取組の4つの分類>*園への質問結果をクラスター分析し分類

分類名 * () は分類した園の%	捉え方・取り組み方
パターン1 子ども主体を尊重している園 (22.2%)	子どもへの関りが応答的で、1人1人の子どもの姿から柔軟に計画を見直している
パターン2 集団としての自主性を尊重している園 (26.6%)	子どもの声を聞きながら、事前に決めた活動に取り組むことを重視している
パターン3 子ども主体に試行錯誤中の園 (30.6%)	子どもの姿を捉えた柔軟な保育を試みているが、子どもへの統制的な関わりや一斉活動も多い
パターン4 集団としての指導を重視している園 (20.6%)	子どもへの指導を重視しており、予め決められた一斉型の活動が多い

*クラスター分析…個々のデータから類似したデータをグルーピングする分析方法

4つの保育の特徴をまとめてみると (一部抜粋)

パターン	子どもの様子	保育計画の特徴
パターン1	子ども同士の豊かな関りの中で、子どもが主体的に試行錯誤しながら、挑戦的な活動に取り組んでいる	計画の立案や変更が柔軟で、子どもの「やりたい」を尊重
パターン2	子ども同士の関りもあり、挑戦的な活動を行っているが、試行錯誤はやや少なく、先生に頼る面もある	計画通りに取り組む傾向が強く、計画の柔軟性は低め
パターン3	子ども同士の話し合いが少なめで、子どもの試行錯誤や挑戦的な活動も少なめ	計画の立案や変更が比較的柔軟で、子どもの「やりたい」を尊重しようとしている
パターン4	子ども同士の話し合いも、子どもの試行錯誤や挑戦的な活動も少ない。子どもが先生に頼る傾向がやや強い	カリキュラムに応じ計画通りに取り組んでいて、計画の柔軟性はほとんどない

上記の4パターンに照らし合わせた時、今の保育はどのパターンに一番近いでしょうか。まずその振り返りが大切になります。自分の又は自園の保育について保育者同士で考え合ってみましょう。その上で、「子ども主体の保育って、どういう保育かな」「子ども主体の保育にしていくにはどんな工夫をすれば良いかな」など、保育者同士の語り合いの中からその答えを見出していくことが大事です。

<Point は、子どもの「やってみたい」と子どもの「試行錯誤」>

事象提示、課題把握という言葉をご存じでしょうか。事象提示や課題把握という言葉は、園の先生方にとってはあまり馴染みの無い言葉だと思います。義務教育の授業構想で使われる言葉です。事象提示は、子ども達にその時間の活動内容につながる事を提示して、子ども達の活動の動機づけをすることです。課題把握は、子ども達が事象提示で確認した活動について、「どうすれば解決できるか」という見通しを持たせることです。課題把握について具体的な例を紹介します。年少さんのクラスで、運動会頑張ったねパーティーを開くことになり、お祝いのためのケーキを作ることになりました。ケーキのスポンジ部分は砂で作ります。でも砂はサラサラしていて固まりません。そこで、保育者は子ども達に、「どうすればケーキのスポンジできるかな？」と問いかけます。そして、子ども達から出た意見から、水を加えれば良いということになります。この水で固めるという事が、課題把握ということなのです。その後の活動で子ども達は、どの位水を加えれば良いか試行錯誤します。そして出来上がったスポンジに自分達で準備した飾りをつけ、ここでも飾り方で試行錯誤。そして見事ケーキを完成させました。



子ども主体の保育での子どもの姿は、「子どもが自分で問いを見つけ、問いに対して試行錯誤しながら解決していく」姿であると思います。しかし、実際の保育は、自由遊びの時間、一斉活動の時間など様々な形態で保育が展開されています。一斉活動では、多くの場合保育者が準備した内容で保育が行われ、保育者主導の保育になりがちな面があるのではないのでしょうか。さてそのような一斉保育を、どう工夫すれば子ども主体の保育に変えていく事ができるのでしょうか。

私は、子ども達と事象との出合わせ方が非常に重要であると思います。上で述べた事象提示です。園ではよく年中行事に合わせて、制作活動をすることがあります。例えば、2月、節分に合わせて鬼のお面を作る園があるかと思います。その際鬼のお面を作ることをどのように「子ども事（子どもにとってやりたいこと）」にしているのでしょうか。また、実際に鬼のお面を作る時、その作り方をどのように子ども達に伝えているのでしょうか。「2月3日は節分ですね。皆さんのおうちではどんな事をしますか？豆まきをするんだね。どうして豆をまくの？そうか、鬼を追い払い、福を迎えるためにするんだね。この園でも豆まきをします。その時の鬼役は毎年年長さんがやります。今日はそのための鬼のお面を作りましょう。先生が作り方を説明します。よく聞いてくださいね。……」こんなやり取りをし、事前に先生が作った鬼のお面を提示、子ども達はそれを真似てお面を作る。このような保育の経験はありませんか？（私は、よく小学校の授業で目にしました）

子どもの持っている鬼のイメージは様々です。また、自分が鬼になったらどんな鬼を演じたいかにも違いがあります。その個々の子どもの持つイメージや願いを大切に活動にすることが重要です。そのためにはまず、鬼について子ども達に考えさせる場面を設け、鬼という題材を子ども事にするということです。鬼は角が2本、顔は赤い、そしてとても怖い形相をしている……、そのような先生のイメージで作られた鬼のお面を提示する事は本当に必要なのでしょうか。私たちは、ともするとこれまでの経験値でしか物事を考えることができなくなっている面があります。しかし、子ども達の発想は私たちよりも非常にバラエティーに富んだものであると思います。その発想を引き出すことが、正に子ども主体の保育のポイントであると思います。

子ども主体の保育のための手立てとして、自由遊びの時間を増やし、子どもが遊び込める時間を保障している園が増えつつあると感じます。しかし自由遊びの時間を多くすることが、子どもの主体性を伸ばすことにつながっているのでしょうか。確かに時間を多くすることは、子どもが思う存分遊べる環境としては有効な手立てと言えます。しかし、大切なことは、子ども達の遊びが「質の高い遊び」になっているかということではないのでしょうか。質の高い遊びは、そこに子どもの願い、こだわりがあります。だから時間を忘れ、試行錯誤を繰り返すことになり、そこに子どもの主体的活動が成立していると思うのです。そして、そのような活動を支援することが保育者の役割であると考えます。子どもの思いを受け止め、どのように環境構成するか。子どもの興味につながるために、どのような種（きっかけ）を撒くか。そのように保育者が保育を試行錯誤することが、保育者に求められているのではないのでしょうか。 (専門員)